

4, 5歳児の語る能力の発達：6歳までに何ができるようになるのか？

幼児の作成した絵本資料からの分析

白井 純子（中京大学）・佐藤 渚（あおぞら幼稚園）・白井 英俊（中京大学）

1 はじめに

これまでの語りの能力の発達では、文字のない絵本などを用いた幼児の語りを分析する手法が用いられてきた。その結果、「5歳後半ごろから明確な時系列的な構造をとった話を展開」する（藤崎、1982）こと、5歳から6歳で言語能力が発達し、「ことばで統括性のある物語を語る（内田、1996）」ことができるようになることなどが示されてきた。

それらの実験的な手法に対し、本稿は幼稚園の4歳児のクラスの活動として制作された28冊の絵本（28人の幼児が自ら創造した絵本）を資料とし、4, 5歳時にどのような能力が発達していくのかを明らかにすることを目的とする。実験的な方法では明らかになりにくい幼児の語りの進め方、話の一貫性についての検討が可能となり、語る能力がより明らかになると考えられる。対象とした絵本は、幼児が一枚ずつ絵を描き、その絵について保育者に語ったことばを保育者が書き取ることによって完成した。そのため、本稿では絵本に記されていることばを幼児の語りであるとする。

2 方法

筆者の一人が幼稚園で担任していた4歳児クラス（28名：絵本制作時に4歳半から5歳半）の活動として、連続しない3日間（計約3時間）で制作された28冊の絵本（3頁～27頁、一枚ずつの絵について記録された語り）と、絵本の内容につ

いての保護者アンケート、および幼稚園の絵本借り出し記録とを分析に用いる。

28名の幼児を、5歳児群（17名）と4歳児群（11名）に分け、(1)絵本のページ数、(2)経験の再話か否か、(3)文末表現（時制）の使い分け、(4)文体（物語の特徴と考えられる敬体を含むか、否か）、(5)話の展開・まとめ（時系列的な話の構成か、ランダムか、それらの複合型か）の5点について分析した。以下では、(1)(2)(5)について詳しく述べる。

3 結果と考察

絵本の頁数の平均は5歳児群が7頁であるのに対し、4歳児群は10頁と多い。これは、頁数が16、17、27と特に多かった3児が存在するためである。これらの4歳児と、5歳児で頁数の多い3児（12、12、13頁）の絵本とを比較すると、5歳児の話はほぼ時系列的に並んでいるのに対し、4歳児では、文がランダムに並んでいて、話のつながりや展開が理解できないものがある。文がランダムに並んでいる絵本は5歳児群では2（17人中）、4歳児群では5（11名中）であった。『絵本との出会い』（1976）に、幼稚園児の話の作り方の傾向として、年長児（5歳児クラス）は「自分で立てた話の筋道や話の展開に大きく影響を及ぼさない事物、事柄は切り捨てて話す」ようになることが指摘されているが、5歳児群の制作した絵本の頁数が短いのは、何を語ろうとするかのプランニングができるようになってきているのか、

	ページ数	経験の再話	時制の使い分け	敬体を含む	話の作り方
5 歳児群 (平均 5;03) 17 名	4~12 ページ 平均 7 ページ	11 名 (創作: 6 名 おばけなど)	16 名	4 名	時系列型 11 複合型 4 ランダム 2
4 歳児群 (平均 4;08) 11 名	3~27 ページ 平均 10 ページ	6 名 (創作: 5 名 恐竜など)	10 名	0 名	時系列型 4 複合型 2 ランダム 5

または、制作している話にまとまりを持たせようとしていることの表れではないかと考えられる。

28 名中 17 名が絵本の内容として体験で用いていることを、保護者アンケートをもとに確かめた。登場人物は幼児自身のほかに、担任、幼稚園の友達、家族である。一歳年長の 5 歳児のクラスでの絵本制作について「経験の再現のない創作は難しい」(丸山、2005)と指摘されているように、この 4 歳から 5 歳台の幼児が絵本の題材として経験を選んだのは当然であり、また、17 人以外の幼児も読書カードの資料などから、実際の体験ではないものの、絵本を読むというような経験を通して得た知識(おばけや恐竜など)を用いて絵本の題材を選んでいると考えられる。体験を題材とした 17 名のうち 16 名が登場人物を加えたり、二つ以上の経験を組み合わせる話を作っていた。幼児は絵本の題材や内容についての取捨選択をしていると考えられる。

話の展開を表すために、多用していたのは順接の接続詞と接続助詞「て」である。また、時を表す副詞や「夜になった。」「家に帰った。」などの表現を用い、時間の経過に従って語っている。しかし、因果関係を表す接続表現の使用は少ない。

以上より、5 歳を過ぎるころに次のよう

な能力が発達していくと考えられる。

1. プランニングの能力
2. 記憶能力
3. 時、時間概念の理解
4. 発話のための言語能力
5. 語る内容の取捨選択能力

この時期にはまだ十分発達していない能力に、詳細に語る能力、語った内容について吟味する能力があると考えられる。因果関係を表す表現の使用は少ないが、本稿で対象としている年齢の幼児に因果関係の理解が進んでいることは既に示されている(大宮、2008 ほか)。時系列的に語り、因果律を用いて語らないのは、発達上の問題か、それとも日本語の問題であるのか(内田、1999)は今後の課題である。

我々は絵本を制作した幼児の他の能力について調査することはできなかった。今後 5 歳児クラス(年長児)で制作する絵本との比較、実験的な場面での言語使用との比較、絵本の語りと絵との関係の分析を行なうことで、幼児の語りの能力がさらに明らかになると考えられる。

謝辞:

あおぞら幼稚園、保護者のみなさまのご協力に感謝します。